

ツバメの父が、お礼を兼ねた食事会をしたいと誘ってきたのが昨夜のこと。

まだ暗い朝が、冬を感じさせる。

眠れなかったわけじゃないけれど——家が少しだけ恋しくなった。
身支度を整えて、昨日伝えられたとおり、門前へ向かった。

「おはよう」

「おはよう、ツバメ」

「早いね」

「自然と目が覚めたのよ」

「枕変えると眠れない人？」

「そう、なのかしら。あまり外泊をしたことがないの」

そんな会話をしていると、家の前に黒いキャビンの馬車が止まった。
ツバメの家が所有しているものらしい。

来るときは乗合馬車^{のりあい}だったけれど、帰りはゆっくり帰れるようにと
彼の父親が手配してくれたのだ。

ツバメのエスコートで馬車に乗り込み、続けて彼も乗る。

^{ぎょしゃ}御者が馬車を出す。

ふたりきりのキャビンの中、口を開いたのはツバメだった。

「ルル。本当に、ありがとう」

「昨日の夕食のときに、さんざん聞いたわ」

「それでも、何度言葉にしても足りない気がしてさ」

「ツバメが正直に話してくれたから、私もそれに応えただけよ」

彼の父からも、たくさんお礼を言われた。

そして、薬のことは秘密にしてくれるとも、約束してくれた。

万能薬はもう、ない。

だからここからは、私自身が努力をしていかなくちゃいけない。

今までがんばってなかったわけじゃないけれど、それでも——。
私は、静かに決意する。



景色を眺めるルルの瞳に、強い意志を感じた。

「なにを考えてるの？」

「これから薬師^{くすし}として、もっとがんばらなくちゃって思っていただけよ」

「ルルは、がんばってるよ」

「……でも、まだまだよ」

ひたむきな努力。

患者とまっすぐに向き合う姿。

そんな彼女の傍^{そば}に、これからもいられること。

「俺、ルルを支えられるようになりたいな」

「え……？」

「俺は庭師で、ルルのように患者さんを診ることもできない。それでも——君の傍に、いたいんだ」

「あなたはこれからも、リーファの庭師よ」

「うん。でも、そうじゃなくてさ」

ぎゅっと握った手に、いっそう力を込めた。

正面に座るルルを見つめて。

どうか、この気持ちが届くようにと願いながら。

「ルルのことが好きだから」

青い瞳が見開かれ、白い頬に朱が差す。
それから、視線を伏せるルルに、俺は続けた。

「これは嘘^{うそ}じゃない。本当に、君のことを想ってる」

「う、疑^うってなんかないわ」

「……そっか。本心を伝えれば、相手に届くんだね」

いつかルルが言ったことは本当だった。
そして、それをすることがどれだけ勇気のいることなのかも、思い知った。

「俺、これからも君に伝え続けるよ。本心と、君への思いを」

「ツバメ……」

「だから、忘れないでいてほしいんだ。俺が君に向き合い続けること」

そう伝えれば、伏せられていた目が持ち上げられる。

「忘れるわけ、ないわ」

ほほえむルルの言葉も、視線も、まっすぐに届いてくる。

「ありがとう」

俺の本当の気持ちを、忘れないと受け止めてくれたこと。
今はただ、それだけでいい。

君を思うほどに胸に明かりが灯^{とも}るようで。

そのあたたかさはまるで、春のようだと思った。

エンディング G 【花ひらく想い】